日本の舞踊の歴史　～住吉祭礼図と祭礼鉾の「舞」に注目して～

メモ）鉄本　　2023.08.01

館内に展示されている祭礼鉾のタペストリーの舞楽図、及び、住吉祭礼図屏風左隻の陣幕内で踊っている人物。これらの「舞い」に注目し、日本の舞踊の歴史を探ってみた。ここでは、歌、楽器については省略する。

1.舞踊の起源

舞踊は原始宗教の儀式（自然の猛威や災厄を乗り切るための祈願の儀式）から発生した。舞踊は、神との一体化、悪魔祓いの動作を発現したものである。

①日本最古の踊り　アメノウズメ（天鈿女命）による性的儀礼 （『記紀』）

『記紀』の記事の意味： 性の生成力で、太陽神に力を与え、また、邪悪なるものを打ち破る儀礼。

②線刻画に描かれている踊り　　弥生土器の線刻画

両手を挙げる鳥装のシャーマン （女性？）
（清水風遺跡　奈良県橿原考古学研究所）
穀霊の運搬者である鳥、土地の精霊である鹿と一体化し豊穣を祈る儀式

両手を挙げる鳥装の女性シャーマン
（清水風遺跡　奈良県橿原考古学研究所）
豊穣を願う呪術的儀礼 「**魂（たま）ふり**」
＊「魂ふり」とは、活力を失った魂を再生すること。

③踊る人物埴輪

埼玉県熊谷市 野原古墳出土の人物埴輪　6世紀
左が男子、右が女子。 左の像は、美豆良をつけ腰紐の後ろに鎌をさした農夫を表している。左手を挙げたポーズから剽軽に踊る人々を連想させるが，同じ古墳からは儀式に参列する人物を表したとみられる埴輪が多く出土しており、おそらく**殯などの葬送の場における歌舞の姿**を写したものとみられる。

（東京国立博物館説明文から抜粋）

2. アメノウズメ（天鈿女命）から猿女君（さるめのきみ）へ

アメノウズメ（天鈿女命）は、猿田彦に出会い夫婦となり、その子孫は猿女君を名乗り、以降、毎年11月の鎮魂祭や天皇即位の際の大嘗祭において歌舞を奏上した。一族は、中臣、斎部両氏とも密接な関係にあり、一族から縫殿寮（ぬいどのりょう）に猿女（女官）を貢進し、猿女は儀礼で死と再生に関わる巫女の役割を果たした。しかし弘仁4年（813）、猿女君から猿女を出す習慣は廃れ、小野臣と和邇部臣に役割が移った。

【参考】縫殿寮とは： 律令制下で、宮中用衣服製造の監督と後宮女官の人事を主な職掌とした部署。

3. 舞踊の三要素　「舞い」・「踊り」・「振り」

日本の伝統的な舞踊は、舞い・踊り・振りの三要素によって構成される。

①「舞い」とは　荘重な歌や音楽に合わせて、跳躍がなく、静かな動作で水平方向にすり足で行う。
「舞い」は神に捧げるもの。
例：雅楽、舞楽、神楽、田楽、猿楽、白拍子、能楽など

②「踊り」とは　軽快な歌や音楽に合わせて、水平運動に加えて地面から離れる上下運動が加わる。
見た目にも動きの激しさがあるのが「踊り」。新仏教の興隆と共に鎌倉時代になって発達。
例：念仏踊り、盆踊りなど

③「振り」とは　歌や音楽に合わせて、日常的な動きやしぐさを舞踊として表現するもの。
演劇的要素が強い。歌舞伎や人形浄瑠璃から派生した。
例：上方舞、歌舞伎舞踊、浄瑠璃など

4. 日本の舞踊の分類

舞踊は、元々祭祀的背景を持って行われた。時代と共に、民衆娯楽となり、踊る舞踊と鑑賞する舞踊に分化してきた。その主催は、皇室や神社など公的組織が行うものと民間で行われるものとがある。

この2つの軸によって分類すると次表のようになる。　＊数字は年代（色分け＝緑：古代、黄：中世、茶：近世）

	祭祀的	饗宴的
皇室系 神道系 特定階層	（神代）　天鈿女命の性的舞踊 （古代）　シャーマンによる呪術的儀礼 683 三韓楽を奏す 7C　猿女（巫女）による歌舞（鎮魂祭） 10C　**雅楽（祭祀用歌舞）の完成** 1002 **御神楽**（みかぐら）の創始	7C　**国風歌舞の宮廷芸能化** （隼人舞、久米舞、吉志舞など） 10C　雅楽（国風歌舞、渡来歌舞）の完成
	（中世）	16C　**能楽の完成**
	（近世）	
民俗的 民間的 広い階層	8C　里神楽（巫女舞） 922　**田楽の初見**（和泉国大鳥明神祭礼） 999　京都松尾神社祭礼の田楽（『日本記略』） ☜上記 2 件は種下（たねおろし）祭か？	8C　中国から散楽（後の猿楽）が渡来 11C　散楽が日本化した**猿楽の隆盛**
	13C　念仏踊り（一遍） 白拍子	14C 曲舞（くせまい；後に幸若舞に発展） 16C　**風流踊り**
		1603 **阿国歌舞伎** 17C　遊女歌舞伎、若衆歌舞伎 *遊女歌舞伎禁止(1629) *若衆歌舞伎禁止(1652) 18C　**元禄歌舞伎** **上方舞の発展**

5. 雅楽の成り立ち

日本には上代からの楽舞がある。一方、渡来の音楽と舞が、仏教文化の渡来と前後して中国や朝鮮半島から日本に伝わってきた。この2つの楽舞が融合して雅楽が成立した。

日本固有の古楽:

・**御神楽**（神を勧請し神と人が共飲食して歌舞する鎮魂呪術）、他に、

・**久米舞**（古代の久米一族の歌舞）　・**五節舞**（ごせちのまい；天武天皇が弾琴の時、天女が出現して五度舞ったという伝説が始まり）　・**田舞**（たまい；五穀豊穣を祈念する舞）、・**東遊**（あずまあそび；元は駿河国付近の地方芸能）　・**倭舞**（やまとまい；大和地方の風俗舞踊が源）　・**大歌**（おおうた；宮廷の公儀で用いられる謡物）　・**吉志舞**（きしまい；神功皇后が征韓から帰朝した時、安倍氏の祖先が奏した楽）　・**楯伏舞**（たてふしのまい；檜前忌寸と土師宿禰を中心に20人ぐらいの集団歌舞）

＜以下は、ヤマト朝廷に服属した先住民の芸能＞

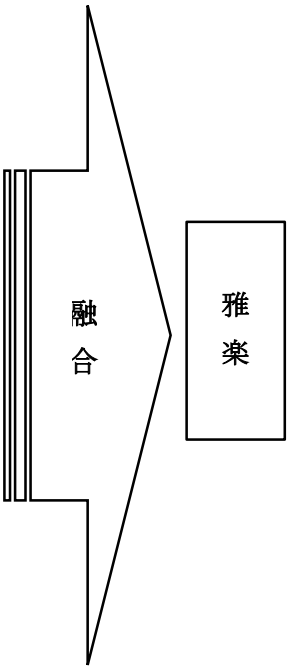
・筑紫舞　・諸県舞（もろがたまい）　・国栖(くず)歌笛（大和国吉野国栖人が奏す）　・隼人舞（ヤマト朝廷に服属した隼人族による歌舞）

渡来音楽を基にした楽舞:

・伎楽（ぎがく）＝最古の渡来芸能。別名「呉楽」 612年に百済の味摩之が教授した仮面パントマイム劇

・中国系　唐楽（とうがく）＝中国の各時代の俗楽を採り入れた宴楽（燕楽ともいう）。舞と楽器合葬の「舞楽」と楽器合葬のみの「管弦」の2形態がある。

・朝鮮系　高麗楽（こまがく）＝新羅・百済・高句麗のものを整理統合して高麗楽とした。簡素で力強い拍子。



雅楽（ががく）は、「**雅正の楽**」の意味で、民衆の間で親しまれる「**俗楽**」と区別される。

雅楽成立までの『日本書紀』の記述；

①允恭天皇崩御の時、新羅の楽人が多数参列

「於是新羅王、聞天皇既崩而驚愁之、貢上調船八十艘及種々樂人八十」

②推古天皇20年（612）の時、百済の**味摩之**（みまし）が大和桜井で伎楽を教授

「又百濟人味摩之、歸化、曰「學于吳、得伎樂儛。」則安置櫻井而集少年令習伎樂儛」

③天武天皇4年（675）の時、全国から芸能の達者な男女を集める詔を発し、**国風歌舞**の保存を目的として日本古来の民俗歌舞が集められ保存された。「勅大倭・河内・攝津・山背・播磨・淡路・丹波・但馬・近江・若狭・伊勢・美濃・尾張等國曰、選所部百姓能歌男女及侏儒伎人而貢上」

集められた歌舞は、隼人舞、久米舞、吉志舞、楯伏舞、国栖舞、倭舞、筑紫舞、諸県舞、東舞、田舞（五節舞）等であった。

④天武天皇12年（683）の時、宮廷で三韓楽を奏す。

「奏小墾田儛及高麗・百濟・新羅三國樂於庭中」

【東遊の様子　春日権現霊験記絵巻より　出典:東京国立博物館】

【東遊】 国風歌舞（くにぶりのうたまい）の1つ。演奏に30分程度掛かる長大な組曲。現行の東遊の舞人は、6人ないし4人。舞人装束は青摺(あおずり)の袍(ほう)に表袴(うえのはかま)をつけ太刀を帯びる。頭には巻纓(けんえい)の冠に緌(おいかけ)をつけ、冠に季節の挿頭(かざし)の花を飾る。

左の写真は、伊勢神宮の東遊の一風景。
1月11日御饌（みけ）の祭典の後、内宮五丈殿で奉納される。

【五節舞　天皇即位の大嘗会でのみ上演】

【五節舞】 日本の雅楽では、唯一女性が演じる舞。大歌に合わせて、4 ～5人の舞姫によって舞われる。
写真は京都国立博物館所蔵の人形。

【久米舞　現在は天皇即位の大嘗会でのみ上演】

岐阜県雅楽演奏会より （宮内庁式部職　客演）

【久米舞】 現存する日本最古の歌舞とされる。古代に久米氏の氏人が舞った古典舞踊。舞人は4人。
久米氏滅亡後は大伴氏、佐伯氏に継承された

【国栖歌笛　　奈良県吉野町浄見原神社】

【国栖舞・国栖奏】 笛と太鼓の音に合わせて2人の翁が舞う。『日本書紀』によれば応神天皇の吉野行幸の際に、国栖の人々が一夜酒と土地の作物を献じ、歌舞を奏したことが始まりとされている。壬申の乱の際には、天武天皇が挙兵前に鑑賞し、即位後、大嘗祭の歌舞とすることを制定した。

6. 舞楽（ぶがく）

雅楽のうち舞を伴う分野を舞楽という。主に**唐楽（とうがく）、高麗楽（こまがく）**をさし、管弦と対をなす。
唐楽は左方（さほう）の舞として左舞（さまい）、高麗楽は右方（うほう）の舞として右舞（うまい）と呼ばれる。
舞人が着る装束は、左舞が赤系統の装束を基調とするのに対し、右舞は緑系統の装束が基調となる。
両者を交互に舞う「**番舞（つがいまい）の制**」がある。番舞の際は、似た演目を交互に舞うことになり、
この対となる舞を前の舞に対応する舞いとして「答舞（とうぶ）」と呼ばれる。
広義の舞楽としては、神楽、東遊など神道系のものも含む。
演目は、古事や国家安泰祈願、迎春の喜びなどを題材にしており、①唐楽として、「太平楽」、「還城楽」など、
②高麗楽として、「胡蝶」、「延喜楽」など、合わせて三十数種類ある。
堺市博物館の祭礼鉾のタペストリー（胴掛け幕）には、側面部に、舞楽の「胡蝶」、「太平楽」が描かれている。
また、前面部には、「猿田彦命」が描かれている。

舞楽「胡蝶」

舞楽「秦王破陣楽」

「蘭陵王」

熱田神宮での舞楽「胡蝶」

厳島神社での舞楽「太平楽」

「胡蝶」	延喜6年（906）、宇多上皇が童相撲を御覧の時に，藤原忠房が曲を，敦実親王が舞を作ったと云われている。 舞人の装束は．蝶の刺繍が施された萌葱色の袍（ほう）を着け、背には蝶の羽を，山吹の花を挿した天冠，右手に山吹の花を持ち四人で舞う。
「秦王破陣楽」	唐王朝の始祖である太宗李世民（598～649）は、ほぼ10年をかけて隋末の群雄を平定していった。このとき、そのありさまを民衆が歌いかつ舞いはじめたのが破陣楽である。それらは、52楽章からなる「秦王破陣楽」にまとめられ、120人の楽人が演舞するようになった。舞人は4人で、甲冑 をつけ、矛 を持って舞う。日本に伝来したのは文武天皇時代と言われ、752年の東大寺大仏開眼供養会で、「破陣楽」「皇帝破陣楽（おうだいはじんらく）」の二曲が演舞されている。 現在、廃曲になっているが、楽譜が残っており楽曲演奏は聴くことが出来る。舞人の外形は、「太平楽」に似ている。
「蘭陵王」	林邑八楽の一つ。単に『陵王』とも言われる。中国の南北朝時代、北斉の蘭陵王長恭は姿形が美しく、戦場での士気が上がらないため、勇猛な面を着けて戦いに望んで大勝を納めたことを祝って作曲されたと云われている。勇壮な中にも優雅さがが盛り込まれた舞になっている。 竜頭を模した極彩色の面を着け、右手には桴（ばち）を持ち、左手は剣印（けんいん；意味は、刀剣を表示する印のこと）で舞う。

7. 代表的な国風歌舞

7．1　神楽

神前に奏される歌舞。古来の形は、神座（かむくら）を設けて神々を勧請して招魂、鎮魂行ったもので、**神遊**（かみあそび）と称された。起源説話として、天岩戸前で天鈿女命が舞った伝承がある。

宮中での御神楽のほか、民間では各地に分布しており賀茂、祇園、春日、住吉、出雲、伊勢など。

①御神楽（みかぐら）

宮中の内侍所で行われる。御神楽の創始は、一条天皇の長保4年（1002）或いは寛弘2年（1005）とされている。当初は隔年に、後に毎年12月の恒例行事となった。天皇の鎮魂を目的とし、祈祷性、神事性が強い。神楽歌を歌うことが主体となっている。

②里神楽（さとかぐら）

宮中の御神楽に対して、民間で奏される神楽のこと。民間では各地に分布しており賀茂、祇園、春日、住吉、出雲、伊勢などで行われる。里神楽はその形態から、巫女神楽、出雲流神楽、伊勢流神楽、獅子神楽の4種に分類されている。

巫女神楽

出雲流神楽

伊勢流神楽

獅子神楽

・出雲流神楽は、「七座」（場を清める儀式舞）、「式三番」（祝福の舞）、「神能」（神話を題材にした舞）の三部構成からなる。

・伊勢流神楽は、湯を振りかけることによって祓い清める呪法の湯立神楽が中心を成す。

7．2　田楽

田園の行事から発生した芸能で、数種類ある。元は田植えに係る楽であったが、平安中期以後、一つの楽舞として成立した。田楽の初見は、延喜22年（922）に和泉国大鳥明神の祭礼に田楽が出たという記録が同社にある。　左の写真は、那智の田楽

①早乙女の田植え：　歌や笛・太鼓の囃子で早乙女が実際に田植え

②豊作祈願の芸能：　小正月の頃、刈り入れまでの稲作の過程をまねる予祝

③田楽踊り：　高足や一足などの曲芸を演ずる田楽法師が、編木（びんざさら）や太鼓を持って、笛の囃子につれて様々な陣形で踊る。　左の写真は栗東市上砥山日吉神社の田楽踊り

【参考】 編木（びんざさら）とは、数十枚の短冊形の薄い木片などを紐で連ねた打楽器。簓（ささら）ともいう。

④田楽能：　古い猿楽能の影響を受けて、田楽法師が演ずる芸能。

7．3　散楽・猿楽・能楽

猿楽は、奈良時代に中国から渡来した散楽（さんがく）の系統。散楽は中国では民間雑芸の総称で、百戯と称される幅広い芸態（物真似、曲芸軽業、奇術魔法など）をもつものであった。

日本化して猿楽と呼ばれるようになった。散楽の芸の一つに物真似があり、そこから真似上手な猿が連想され、サンがサルに音韻変化し、猿楽という名称になったという説がある。

猿楽の芸のうち、曲芸軽業の芸は田楽に吸収され、奇術魔術の類は傀儡師が専業として猿楽から独立していった。職業的猿楽者の多くは寺院や神社に隷属し祭礼などの奉仕を行った。

室町時代の初め、観阿弥・世阿弥父子によって、猿楽は今日の能楽に近い形に整えられ、能と狂言の交互上演に形式が定まった。

8．中世的舞踊から近世的舞踊へ　　～風流から歌舞伎踊へ～

近世初頭（安土桃山以降）に、長く続いた戦乱で命を落とした人々の魂を鎮魂する御霊会を伴った**風流踊**が　全国に大流行する。

この風流踊を母胎として、歌舞伎踊が登場する。

【参考】 風流踊とは：　風流踊は、華やかな、人目を惹く、という「風流」の精神を体現し、衣装や持ちものに趣向をこらして、歌や、笛・太鼓・鉦（かね）などの囃子に合わせて踊る民俗芸能。

除災や死者供養、豊作祈願、雨乞いなど安寧な暮らしを願う人々の祈りが込められている。郡上踊（郡上市）、西祖谷の神代踊（三好市）、勝手神社の神事踊（伊賀市　左の写真上）、新島の大踊（東京都新島村　左の写真下）など41件が「**ユネスコ無形文化遺産**」に登録された。

住吉大社には住吉踊りがある。

①かぶき踊り

歌舞伎踊は、中世的な舞と異なり、仮面を着けず振りを揃えて踊る舞台芸能として成立する。

最初は出雲大社の巫女の出身と言われる出雲阿国が京都に上り、「**ややこ踊**」と呼ばれる芸能を演じたことに始まる。阿国一座は京都・北野神社に小屋を設け、当時巷を横行していた「**かぶき者**」の風俗を舞台に採り入れたことにより、大衆から熱狂的な支持を受けた。文献上の初見は、『御湯殿上日記』の天正9年（1581）9月9日の記録。出雲阿国は、男装して伊達なかぶき者に扮し、**猿若**（道化師役）を共に連れて、女装の狂言師が扮する茶屋女のもとへ通っていく「茶屋遊び」の様子を官能的な踊で演じてみせた。「歌舞伎踊」という名称が史料で初見されるのは、慶長8年（1603）5月である。

右図は、京都国立博物館収蔵 『阿國歌舞伎圖屏風』（重文）の一部。出雲阿国は、ロザリオを首にかけ派手な服を着てかぶき者と言われる若い男の服装をしている。

【参考】 ややこ踊とは：　中世末から近世初めにかけて行われたヤヤコ（幼女、少女のこと）による小歌踊の芸能。女歌舞伎に採り入れられて主要な演目になった。

【紙本著色歌舞伎草紙　徳川美術館】
本図は詞書のはじめに「采女序」とあることから、歌舞伎を創始した阿国の追随者のひとりである**采女**の舞台を描いていることがわかる。
「ふじのおどり」「しのびおどり」「いなばおどり」「かねきき」「して」と題された五種の踊りと、最後に初期女歌舞伎の最も代表的な出し物である「茶屋遊び」を描いている。群舞する遊女歌舞伎とは異なり、きわめて**初期的な女歌舞伎**の芸態を表している。

②遊女歌舞伎

右図は、静嘉堂文庫美術館所蔵『四条河原遊楽図屏風』（重文）の一部。都市には遊里が出来、そこに遊女たちが芸団を組み、華やかな群舞を行う遊女歌舞伎が行われた。この頃、渡来の**三味線**が伴奏に使われ始めた。
芸団は続々と地方巡業を行い、また、地方でも土着の女歌舞伎の座ができた。幕府は風紀を乱すという理由で、寛永６年（1629）に女性芸能を禁止にした。

③若衆歌舞伎

遊女歌舞伎に代って台頭したのが、若衆歌舞伎であった。若衆歌舞伎は、美少年を主演者とし、主として舞や軽業を演じた。若衆歌舞伎は遊女歌舞伎全盛期に併行して行われていたが、遊女歌舞伎禁止後、俄に社会の表面に現れた。この時期に流行した舞に**小舞十六番**がある。内容は、恋愛、滑稽など身近な事柄、感情を扱ったものが多い。しかし、若衆歌舞伎も衆道の点から遊女歌舞伎と同様の弊害をもたらすとの理由から承応元年（1652）に禁止された。

④野郎歌舞伎

若衆歌舞伎の禁止を受けて、若衆の象徴である前髪をそり落として野郎頭になること、扇情的な舞や踊ではなく、「物真似狂言尽」を演ずることの二条件を受け入れて承応2年（1653）に「野郎歌舞伎」として再開することが許された。これが「元禄歌舞伎」となり、今日の歌舞伎につながる。

【住吉祭礼図に描かれている「舞」の考察　　～江戸初期に流行した「**小舞**」か？～】

・「祭礼図」が描写している時代：　17世紀初期（慶長年間～江戸初）か？
　☜　根拠：大和川の描写がない。殆どの女性の髪型が垂髪。
　　商家の暖簾が日除けのみで「水引き暖簾」が見られない。
・踊る人物の姿：　若衆髷、小袖の着流し、扇子、太刀
　（太刀を右腰に差しているように見える。これは武士社会ではご法度！）
・17世紀初期に流行した舞踊：　若衆歌舞伎時代の小舞（こまい）。
　舞の基本技術を習得するための「**小舞十六番**」が制定された。
　これを収録したものに、『**業平躍十六番**』がある。

【参考】

★小舞（こまい）十六番とは： 江戸初期の若衆歌舞伎時代に流行した舞踊。主に室町末期から江戸初期にかけて流行した小歌に振りをつけたもので、基本的なものとして十六番が選ばれている。選ばれた曲名は諸書によって異なる。『業平躍十六番』（1681年刊行）は現存する最古のものでその中の一つ。他に、『舞曲扇林』（1689年刊行）、『落葉集』（1762年刊行）がある。

★業平躍（なりひらおどり）十六番とは： 若衆歌舞伎の代表的な踊歌を集めたもの。仙台塩竈神社で発見された史料は「大小狂言」のこととしている。太陰暦では、「大の月」、「小の月」、「閏月」が年によって変わる。その年の月の大小を言い立て、踊歌をまじえて踊る（「**大小の舞**」）。男舞とも呼ばれている。

大小の舞図 紙本著色 作者不詳 板橋区立美術館所蔵
「大小の舞」は、若衆歌舞伎の代表芸。絵図は MOA 美術館、早稲田大学演芸博物館術館などでも見ることができる。MOA 美術館の図では、人物の着衣の右袖に「大」「小」の文字が見られる。

★江戸初期の代表的役者： 猿若勘三郎（猿若座/中村座の創始者 後に、初代中村勘三郎を名乗る）、玉川千之丞（名女形、「高安通」は当り狂言）、右近源左衛門（女形の祖。月代を隠すために置手拭を考案）

9. 上方文化と江戸文化 ～「舞」と「踊」 上方舞と歌舞伎舞踊～

江戸初期までは文化の中心は京・大坂であったが、江戸中期以降は江戸に中心が移っていった。
歌舞伎については、江戸では武士中心の社会的気風を背景に「荒事」（市川団十郎が代表的役者）が好まれ、一方、上方では「和事」（坂田藤十郎が代表的役者）が好まれた。江戸では、歌舞伎から派生した**所作事**（歌舞伎舞踊のことで、「娘道成寺」、「藤娘」などが代表）が人気を博し、江戸中心に発展していく。一方、上方では貴族の屋敷や料亭などの座敷といった「限定された狭い空間」での舞（**上方舞**、座敷舞、地唄舞、京舞など）が流行する。

9．1 上方舞

上方舞は上方における地唄を伴奏とする舞で、「地唄舞」が主体となっている。上方では単に「舞」と呼ばれ、江戸時代の中期（1800 年頃）から末期にかけて全盛期を迎えた。<u>江戸で発展した歌舞伎舞踊が、「踊（おどり）」を根底にしているのに対して、上方舞は「舞」の伝統を基盤にしており</u>、江戸の舞踊と区別するために「上方舞」「地歌舞」「座敷舞」と呼ばれるようになった。

舞は元々座敷で舞われたもので、着流しで舞うこともあり、全盛期であった江戸時代後半頃は、舞う人達（中流上流の女性達や花柳界の女性達）が普段から裾を引いた着物で舞っていたため、裾引きの着物で舞うこともある。

【参考】 「日本舞踊」というのは明治になって洋行帰りの坪内逍遥が命名した新語であり、それまでは「歌舞伎舞踊」を「踊」、「地唄舞」「上方舞」「座敷舞」を「舞」と言っていたのを 1 つの言葉にまとめたもの。「日本舞踊」は、「能」の技法を継承しつつ、「歌舞伎」から派生して成立したとされている。

9．2　日本舞踊の代表的流派　　五大流派

五大流派をはじめとする日本舞踊の多くは江戸で創流されたものが多く、舞台上で披露することを目的としている。

①西川流：　初代西川仙蔵が元禄時代に興した**最も古い日本舞踊の流派**

②花柳流：　四代目西川扇蔵の高弟だった西川芳次郎が独立。**日本舞踊最大の流派**

③藤間流：　1700 年前後に振付師として活躍していた藤間勘兵衛が創流

④坂東流：　文化文政年間の歌舞伎舞踊の名人三代目坂東三津五郎が立てた流派

⑤若柳流：　初代花柳壽輔門下だった花柳芳松が 1895 年に興した流派　**座敷舞**

9．3　上方舞の代表的流派　「上四流」

上方では独自の舞踊が発展する。上方では貴族の館や大商人の屋敷で踊りを披露することが多かったことから、歌舞伎から生まれた日本舞踊よりもコンパクトな空間（座敷）で踊る、シンプルで抽象化された舞踊となった。

①山村流：　文化文政時代、上方で活躍した三代目中村歌右衛門の振付師をしていた山村友五郎が創流。畳一畳の空間で優雅に舞うために工夫さ、所作は能の流れをくむ行儀の良い舞。

②楳茂都（うめもと）流：　幕末に初代楳茂都扇性興した流派。
宮中の奥義に西洋の音楽などを取り入れた舞。

③井上流：初代井上八千代が近衛家、一条家といった最高位の摂家で風流舞を学び、「八千代」の名と「井菱」の紋を頂き創流。祇園の芸妓・舞妓が学ぶ唯一の流派で祇園からの門外不出　男子禁制

④吉村流：　幕末に京都の御所に出入りしていた狂言師が始めた御殿舞が元となった流派。
四世雄輝の長男は俳優のピーターこと池畑慎之介さん。

【参考文献】

・『日本の伝統芸能講座　舞踊　演劇』服部幸雄　監修　　国立劇場企画・編集　　淡交社　　2009

・『歌舞伎事典』服部幸雄/富田鉄之助/廣末保　編　　平凡社　1983

・「民俗芸能【風流踊】一覧」　報道発表資料　文化庁　2022

・帝京大学文学部紀要31　「天武天皇の音楽教育政策」　井上正　2006

・『調べて学ぶ　日本の伝統　4　芸能』黒石陽子/丸茂祐佳/三浦裕子　監修　大日本図書　1996

・HP:　日本舞踊とは？歴史や特徴、五大流派についても解説！｜ワゴコロ (wa-gokoro.jp)

・HP:　雅楽 - 宮内庁 (kunaicho.go.jp)

・HP:　舞楽の演目 (yoshik.boy.jp)

・HP:　雅楽 GAGAKU｜文化デジタルライブラリー (jac.go.jp)

・事典類　『日本大百科全書』、『日本歴史大事典』、『広辞苑』、『山川日本史小辞典』

・Wikipedia